明けない夜はないよ

樹璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
明けない夜はないよ

【Ｎコード】
Ｎ８４０５Ｄ

【作者名】
樹璃

【あらすじ】
香川美咲は、いじめられている斉藤友里を助けてあげようとしたが、なかなかうまくいかない。いじめっ子の身にはいったい何があるのでしょうか？？？

プロローグ（前書き）

このお話は、現実にあったものではありませんのでご了承ください。

プロローグ

5月1日、晴れ。
美咲(みさき)は平日にもかかわらず、学校へ行っていない。
学校なんて行きたくないと思っている。
彼女の名前は香川美咲(かがわみさき)。中2だ。
美咲は、中1の3学期から学校へ行っていない。
理由は、いじめだ。
いじめは、何も罪のない人をも殺してしまう。
一種の犯罪といってもいい気がする。
だがある日、美咲の人生を変える日が訪れる。

美咲は、素直で正直者でとってもいい子だった。
そのため、学級の役員を引き受けたりもしていた。
そんな美咲の身に何が起こったというのだろうか？
美咲は中学に入ってすぐ、いつものように学級委員に立候補した。
誰もいなかったため、無投票当選になった。
そして、その後しばらくも美咲は美咲らしくすばらしい人生を送っていた。
はずだった・・・。
2学期のある日、美咲は1人のクラスメイトの友里が気になったので声をかけた。
その子はいつも、1人で暗かった。
『ねぇ、どうして誰とも話さないの？』
「・・・・・。」
美咲が話しかけても何も答えようとしなかった。
美咲はその子を放ってはおけなかった。

美咲は手紙を書くことにした。

「友里ちゃんへ」
はじめまして！！香川美咲です！！
えっと、斉藤友里（さいとうゆり）ちゃんでいいのかなぁ・・・？
いっつも一人でいるから、気になっちゃった。
どうしたのかなぁ・・・？って思って声をかけてみたんだけど、
美咲と話しにくかったら、手紙交換しようよ！！
悩み相談いっぱい乗ってあげる！！
いやな奴いたらうちがぶっ飛ばしてやるよ！！なぁ～んちゃって（笑）
いつでも声かけてよ。
待ってるからさぁ～～～
じゃね♪
美咲より

この手紙が友里と美咲の人生を大きく変えることになる・・・。

＊＊＊＊手紙の返事＊＊＊＊

次の日、美咲は友里に手紙を渡した。
するとお昼ぐらいに手紙が返ってきた。

「香川さんへ」
お手紙ありがとう。
とっても嬉しかったです。
友里のことは友里って読んでください。
香川さんのこと、美咲ちゃんって呼んでもいいですか？

＊それから、学校では私に関わらないほうがいいと思います。

友里より♪

この手紙を読んだ美咲は、なぜ友里が関わらないほうがいいのだと言っているのか分からなかった。

それからしばらくして、友里から手紙が届いた。

「美咲ちゃんへ」
お願い！！！
助けて！！！
私、いじめられてるの。

美咲はびっくりした。美咲はどうしようか迷ったが、一度友里と相談してみることにした.

『友里、いったい何があったの？？？私に何ができるかわかんないけど、全部話して？？』
「美咲ちゃん、私ね、いじめられてるの。もうずっと前から・・・。臭いって言われるの。菌が移るって言われるの・・・。あんたなんて・・・」
『あんたなんて何？？？』
「あんたなんて死ねばいいのに！！！っていろんな人から言われるの・・・。」
『ひどい・・・。泣かないで友里、何とかするから。絶対助けてあげるから。私と友里はもう友達なんだから！！1人じゃ何もできないあんな奴らなんかに、友里も負けるんじゃないよ！！一緒にがんばろ？？ねっ！！』
「ありがとう美咲ちゃん・・・。」
そのあと二人は誰にいじめられているかなど、話し合った。

そして今後についても話をした。
友里は、美咲の前ではじめて笑った。

＊＊＊＊そして運命の日＊＊＊＊

美咲と友里は一緒に登校した。
美咲はいじめをしていたと見られるリーダー格人物を、呼び出した。
『自分がしたこと分かってるよね？！』
強い口調で美咲は言う。
「はぁ？ほざくな？！てめぇに何したってんだよ！！」
こいつの名前は千葉真樹（ちばまき）。真樹は友里と小学校のときから同じだ。
真樹は、小学校のときはいたって普通の子だった。が、中学に入ってから変わってしまった・・・。
しばらくして、陰で見ていた数人がやってくる・・・。
『1人じゃ何にもできないんだね。』
「てめぇこそ何もできてねぇじゃねぇかよ！！友里ぃ！！！」
『友里に次手出したらどうなるか分かってる？！』
「わかんねぇ！！てか、おまえ何様？！学級委員だかなんだかしんねぇけど気取ってんじゃねぇよ！！」
美咲はこの言葉に弱かった。自分は偽善者だといわれるのが一番いやだった。だけど本当に本当は偽善者なんかじゃなかった。いじめられている子を助けてあげる立派な子だった。だけど、そこにいる人たちはみんながみんな敵だった。立ち向かうのも初めてで、美咲も本当は怖かった。
「あれぇ？？美咲ちゃぁん、震えてるけど？？？っぷ！！！弱ぇ～んじゃん！！おぃ！！みんなやっちまえよ！！うちに逆らうなんて１００年早いよ！！クズがぁ！！２人一緒に逝っちゃいますかぁ？？？ははは～～～」
美咲と友里は、何も言えないまま女子トイレに連れて行かれた。
「みんなぁ～好きなようにやっちゃっていいよぉ！！！」

「真樹ぃ、やばいよ・・・。」
周りの奴らが言い出す。すると真樹はすぐにこう言った。
「てめぇら！！！逆らったらどうなるかわかってんのか？？？友里みたいになりたくなかったらさっさとやっちまえ！！！殺す気で行け！！！」
2人はいきなり髪の毛をつかまれ、トイレの便器の中に顔を突っ込まれた。
「飲め飲め～～～飲まねぇと地獄に送ってやるぞぉ！！！ぎゃははははは～～～」
『ごっほげっほごぼごぼごぼ』
「きったねぇ～コイツ吐いたぜ！！！マジありえねぇ！！！さっさと死ねよ！！ほらっ！！」
「おい友里！！！何でちくってんだよ！！うち等友達だろぉ。なぁ！！！」
「あんた達なんて本当の友達じゃない！！」
とっさに友里はそう答えるが、聞きもせずに真樹はこういった。
「おぃ友里！！てめぇうち等なんかよりもそんなクズ信用しちゃって！！所詮そいつは学級委員だからって威張ってるだけのただの偽善者なんだよ！！どうせそいつもあとで友里を利用しようとしてたんだよ！！そんなことも分かんねぇのか？！」
『違う！！！友里！！！信じてお願い！！！』
「喋んじゃねぇよ！！！クズ！！！次言ったらマジで殺すからなぁ！！！友里！！お前も分かったならやれよ！！！それとも、大切な大切な美咲ちゃんをどう助けるのかなぁ・・・？？？？」
「わあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」
大声で泣き叫んだのは友里だった・・・。
そして友里は真樹を突き飛ばしトイレから出て、学校の屋上から飛び降りてしまった・・・。

そのまま友里は、帰らぬ人となってしまった。

たった13年の人生の幕を、ここで閉ざしてしまった。

その日、美咲は涙すら出てこなかった。
かといって、美咲の顔に笑顔はない・・・。
当然、この日から学校へいけなくなってしまった・・・。
友里を助けてあげられなかった無念さ、そして何よりもなぜ友里でなくちゃいけなかったのだろう？
あの日あの時、真樹に言いに行きさえしなければ・・・。美咲と友里は2人で笑い合えていたかもしれない・・・。
そう思うと、戦いたくても真樹に立ち向かっていくことはできなかった。
美咲は、何度も何度も自分を責めた。
友里のお葬式にも行けなかった。友里の死が、怖くて怖くて・・・。
その日も泣けずにいた。
美咲はずっと、音楽の世界に閉じこもってしまうようになった。
そしてご飯も3日に一度ほどしか食べられなくなってしまった。
美咲はどんどんどんどん弱っていく・・・。

＊＊＊＊母という存在＊＊＊＊

美咲の母、瑠美子（るみこ）は日に日に弱っていく娘を見て毎晩毎晩泣いていた。
美咲の部屋からは、大音量の音楽しか聞こえてこない・・・。
そしてご飯も食べられない・・・。
瑠美子は学校に何があったのかを聞いてみた。
聞いてみると、クラスメイトの1人が屋上から落ちて死んでしまった次の日から学校へ来てないことから学校の先生もショックで来ら

れないものだと思い込んでいた。
しかし、瑠美子は友里の名前も聞いたことがなかった。
その時だった。家のチャイムが鳴った。
「どちらさまですか？」
と瑠美子は聞いた。
「初めまして。私、斉藤友里の母でございます。」
友里の母の友子（ともこ）だった。
「どうぞあがってください。」
瑠美子は言った。
「友里の部屋を掃除していたら、こんなものが出てきたんです。」
美咲が、友里にはじめて書いたあの手紙だった。
瑠美子はそれを見てもなにも理解ができなかったので、そのまま友子が話を続けた。
「友里は、いじめられていたんです。私は当然知りませんでした。美咲ちゃんからこの手紙をもらってはじめて私にいじめられていることを打ち明けてくれたんです。友里につらい？と聞いたときあの子は言ったんです。［今はつらくないよ］って。どうしてだか聞きたかったけれど、聞きませんでした。あの子は笑ってくれたから、安心していました。しばらくして、泣きながら家に帰ってきたことがありました。美咲ちゃんは私に事情を説明してくれて、泣き止むまでお家で友里のことを見ててくれました。そして帰る時に言ったんです。『友里ちゃんは何にも悪くありません。だから私は、自分がいじめられてもいいから、いじっめっ子に自分がしてしまった過ちを分からせてあげます。弱いのは友里さんじゃありません。いじめっ子が弱いんです。人間として・・・。明日になったら私たちその子に立ち向かって話をします。私、その子がどうしても許せないんです。だから・・・。』それで私は［ありがとう。美咲ちゃんがいて本当に助かったわ。これからも友里の事を守ってあげてね。］ってそう言ったんです。だから美咲ちゃん、自分に責任感じてるんじゃないかと思って・・・。ずっと気にはしていたんですが、連絡

が遅れてしまって申し訳ありません。私も友里が死んでしまったもので悲しくて悲しくて・・・。本当に申し訳ありません。」
すると泣きながら瑠美子は言った。
「そうなんですか・・・。そんな話、美咲から聞いたことはありませんでした。これから私はどうしていけば言いのでしょう・・・・・。」
「私だって美咲ちゃんがいなかったら、友里がいじめられているのを知らなかったんです。まずは美咲ちゃんの心のケアが大切だと思いますよ。美咲ちゃんはまだ生きてるんです。そして、お母さんとしてできることをこれからゆっくり考えてはどうですか？それと、友里が死んでしまったからそれで終わりではないんです。始まりなんですよ。これからみんなで戦っていくんです。証拠をつかんで訴えることだってできます。ゆっくりで良いんです。友里のためにも、美咲ちゃんのためにも私たち親ができることを精一杯力を合わせてがんばりましょう！！」
友子は、瑠美子が泣き止んだと同時に帰っていった。
すると瑠美子が立ち上がりご飯を作り始めた。
いつもなら瑠美子と美咲の父の分で２人分。
でも、今回は３人分を。
まずは我が娘の心のケアが大切だと考え、部屋にノックなしで入り音楽を切った。
そして美咲のほうを見た。
瑠美子は、母として大切なことは何だと考えていた。
そして瑠美子は美咲に言った。

「さぁ、美咲。下に行って一緒にご飯を食べよう。外はね、天気がものすごくいいんだよ。カーテンを開けてごらん。ほらね。」
『・・・・・・。』
「美咲！！しっかりしなさい！！お母さん何があったか知らないけど、天国で友里ちゃんきっと悲しんでる。美咲！！お母さんに全部

話して。何があったのか教えて。」

『私が友里ちゃんを殺しちゃったんだよ・・・。私が・・・。私が・・・。わぁぁぁ～～ん」

美咲は、友里が死んでしまってからはじめて泣いた。美咲はきっと誰かの助けを待っていたのだろう。

すると、瑠美子が言った。

「美咲、友里ちゃんはどうして死んでしまったのだと思う？美咲は友里ちゃんが死んでしまって悲しいよね。どうして助けてあげられなかったんだろうって、思うよね？美咲がそんな風に考えてしまう気持ちも分かるよ。でもね、今、美咲は何をしなくちゃいけないの？こんな風に逃げてていいの？音楽の世界に閉じこもったって、何にも解決しない。お母さんもね、すっごくすっごく悲しかったよ。理由も分からずに美咲は悲しんでる。それだけでつらかったよ。考えてみて。1人で天国へ逝ってしまった友里ちゃんは今の美咲を見て、どんな風に思ってるかな？今の美咲を見て、安心して生活できてると思う？友里ちゃんは今、美咲に何をしてもらいたいんだと思う？友里ちゃんね、美咲に手紙もらってからお母さんの前で少しづつ、笑ってたんだって。だから友里ちゃんのお母さんも安心できたんだよ。［笑う］っていうささいなことで、当たり前のようなことが友里ちゃんのお母さんを安心させたんだよ。だから美咲、少しづつでいいの。笑って・・・。前みたいに『お母さぁ～ん』って笑顔で言って。みんなを安心させて。あせらなくていいの。ゆっくりでいいの。お母さんからのお願いきいて。」

美咲はたまっていた涙が、滝のようにあふれ出た。

そして泣き止んだころに、美咲のお父さんが帰ってきた。

美咲のお父さんは、音楽が鳴っていないのに気づき美咲を抱きしめてくれた。

美咲は少し照れくさそうに笑っていた。

その日の晩ご飯は美咲の大好きな手作りハンバーグだった。

久しぶりに家族みんなでおいしくハンバーグを食べて美咲は眠りについた。

＊＊＊＊学校＊＊＊＊

美咲はやっと落ち着いてきた。
まだ、学校には行けないだろうと誰もがそう思っていた。
美咲はあの日から変わった。
毎日ちゃんとご飯も食べるようになって、だいぶ元気そうになっていた。
食事のとき、美咲が言った。
『明日から学校に行くから学校に連絡しておいて。』
当然瑠美子は、おどろいた。
「いいのよ無理しなくても。」
『無理なんてしてないよ！！だって友里ちゃんはもっともっとつらかったはずだもん！！私がこれからできることちゃんとやらなきゃね。』
「わかったわ。教室行けるの？」
『うん。大丈夫だよ。』
美咲は怖さなど忘れていた。
きっといじめはなくなっているはず・・・。
だが、現実はそう甘くはなかった。
美咲の学校は、3年間クラス替え無しの変わった学校だった。
だから当然、あの真樹も同じクラスだった。
大丈夫。そう信じて学校へ向かった。

『みんなおはよう！！』
美咲は我を忘れたかのように、大きな声でクラスのみんなにあいさつをした。
すると一番初めにやってきたのは真樹だった・・・。

「おはよ！！美咲ちゃぁ～ん！！今日もいい天気だね♪今まで何してたの？学校来たら楽し～いことがいっぱいあるのにぃ」
『楽しいことってたとえば何？』
「そんなこともわかんないの？っぱっかじゃなぁ～い！！友里と同じことしてあ・げ・る♪」
美咲は数人に囲まれる。
『やっぱりあんたは1人じゃ何もできないんだね。』
「てめぇ、生意気なこと言って！！殺されたいのか？！あぁ？！」
急に美咲は真樹に胸倉をつかまれた。
美咲はその手を勢い良く振り払った。
『自分がしたこと、まだ何も分かってないんだね。最低！！私は別に1人でも良いから。あんたたちみたいに卑怯な真似しないよ！！』
美咲の言うことは正しい。だけど、クラスの誰もが真樹のことを怖がっていたので見ていることしかできなかった。
チャイムが鳴り、みんな一斉に席についた。
授業が始まってからも、後ろから色のついたペンキやら、消しゴムやら、なんやらを投げられた。
いじめはまだ続いていたのだった。

＊＊＊＊悪夢のような毎日＊＊＊＊

それから美咲は、何日も、何日も休まず学校に行った。
でも、いじめが終わることはなかった。
クラスの中で人気者だった美咲・・・。
でも、美咲に話し掛ける人は1人もいなかった・・・。
美咲に話し掛けると、次は自分がいじめられるんだ。
みんなそんな風に思い込んでしまい、美咲を助けようとする人は現れなかった。
それでも美咲は、がんばっていた。
できることを精一杯がんばっていた。

そんなある日のことだった。
美咲は担任のの伊上雅人先生に呼び出された。
「香川、いじめられてるって本当なのか？」
『先生には関係ありません。』
美咲の心境は、『今更何？！』という感じだった・・・。
「お願いだ本当のことを話してくれ。」
『どうして先生はそんなに知りたいんですか？』
美咲は、この質問で先生を確かめようとしていた。
「先生な、斉藤がいじめられてたの知ってたんだ。」
『知ってたならなんで！！！！！！！』
美咲は叫んだ。
「最後まで話を聞いてくれ。先生な、斉藤のこと助けたかったんだ。でもな、俺は無力だった・・・。千葉にな、話をしたことがあってな。でも、斉藤は逆にいじめられてしまった・・・。俺の・・・俺のせいで・・・。」
先生は泣いていた。
美咲はふと、自分のことを思い出した。
そして続く先生の話で心を開いた。
「先生もな、昔いじめられていたんだ。中学生のとき、不登校になった。そんな時な、担任の先生が助けてくれたんだ。だからな、俺は学校の先生になるって決めたんだ。だから、斉藤のために自分が辞職してでも良い。助けてやりたかった・・・。でもな先生、弱い人間だから負けてしまった・・・。何度謝ってももう、斉藤は帰ってこないのに・・・。」
美咲は先生も『助けられなかった私と同じ気持ちなんだ』と思い、こう言った。
『先生や私にできることって何だと思う？私ね、先生がさっき言ってた通り今、いじめられてるよ。でもね、がんばってるの。戦ってるんだよ。そしてね、いつかみんな自分がしてること間違ってるって思うときが来るまで戦いつづけるよ！！！それが今、私にできる

精一杯のことなんだ。先生は？何ができると思う？』
「香川は、強いなぁ・・・。先生なんだか情けないよ。」
『そんなことない！！先生、辞職してでも良いから助けたいって言ったよね？私もね、自分がいじめられても良いから助けたいって思ったの。だからね、先生も立ち向かってがんばったんじゃん！！充分強いよ。』
「先生・・・斉藤や香川のために何ができるかよ～く考えてくるな。」
『先生は味方でいてくれますか？』
「あたりまえだよ！！もう、見捨てたりなんかしない！！約束するよ！！がんばるから。」

＊＊＊＊真樹の家＊＊＊＊

真樹の家は、ごく普通のよくある一家だった。
父に母、そして弟がいた。
だがある日、真樹の人生も大きく変わってしまった・・・。
中学校に入学したと同時に、父親がリストラされた。
会社はつぶれてしまったため、お金も何もかもがなくなってしまった。
そして、父親は働かなくなってしまった。そしてイライラで母親に暴力を振るった。
何ヶ月かして母親そんな生活には耐えられなくなり、弟と逃げていった。
真樹は1人いなってしまった。
真樹も当然、母親と一緒に逃げたかっただろう。
しかし母親は、弟の面倒しか見切れないと思い弟だけを連れて、行ってしまった。
その後の真樹の生活は、友達の家に泊まらせてもらったり、稼ぎのため中学生でバイトをしたりもしていた。

真樹は完全に心を閉ざしてしまった・・・。
学校を休むと、家に電話がかかってくるので学校にはちゃんと毎日行った。
でも真樹はここで過ちを犯してしまう・・・。
ちょっとした出来心で、真樹は友里を集団でからかった。
友里は何も言わなかった。
友里は優しかった。きっといつかやめてもらえると思っていた。
それを信じて、友里はがんばっていたのだ。
真樹は本当に本当はいい人だと、友里は信じていたのだ。
でも、そんな気持ちを踏みにじるように真樹のいじめはエスカレートしていく・・・。
真樹は友里に雑用をやらせて、欲しい物を万引きして来いと言った。
いわゆる〝パシリ〟だ。
それから学校では、教科書に「死ね」と書いたり殴ったり・・・。
蹴ったり・・・。
真樹は完全に、いじめをすることでストレス発散をしていた。
何か気に入らないことがあれば、友里を殴った。
真樹は人として、人間として、最低なことをしてしまった・・・。

＊＊＊＊大人たちがやらなくてはいけないこと＊＊＊＊

美咲は、何度も何度も言った。
『こんなことして何が楽しいの?!みんな友里のこと忘れたの?!』
毎日一回は叫んでいた。
だが、いじめが終わることはなかった・・・。
ある日、先生は真樹を呼び出した。
真樹の父親に連絡をしたらしい。
もう何日も家には帰っていない。と言われたので先生も考えた末真樹を呼び出した。
「千葉、家に帰ってないってどういうことだ?」

先生が言った。
すると真樹は
「うぜぇ！！！死ね！！！！」
と言って職員室から出て行った。
先生は次の日、美咲にこのことを伝えた。
そして、しばらく様子を見ることにした。

そんな、ある日のことだった。
いつものように、美咲は教室に入る。
またあの悪夢が待ってる。そう思った時だった・・・。
教室の雰囲気がなんだか変だ。
いつもなら教室に入ると美咲はすぐにいじめられたのだが、よく見ると真樹の周りに誰も集まっていない・・・。
真樹はこっちを見ると、美咲の所へ来ようとした。
その時！！
「ね～ね～真樹のお父さんリストラされたんだってぇ～」
「え～何それ？？？」
「どうやって暮らしてたの？」
「うちん家泊まりに来た事あるよ～」
「マジで？！じゃあホントなんじゃん！！」
「バイトもしてたんだって！！オヤジとセックスでもして金もらってたんじゃな～い」
「何それぇ？キモぉ～！！」
「美咲いじめてたのも、ストレス発散でしょ？」
「ってか真樹って最低じゃん？！」
クラスのみんながその話題で盛り上がる。
そして当然いろがつく。
クラスのみんなが軽蔑の目で真樹のことを見つめる。
そして一斉にクラス全員が真樹の敵になった。
真樹はその場に立ちすくむ。

美咲がみんなを止めようとした瞬間だった。
「いい加減にしろよ！！！てめぇら全員ぶっ飛ばすぞ！！！」
真樹が叫んだ。
「やれるもんならやってみろよ！！ヤリマンちゃん♪」
「ちげーっつってんだろ！！マジ殺すぞ！！」
「真樹ぃ、いい加減にしろよはあんたが言うセリフじゃないよ～はははははは～」
教室中に笑い声が広がる。美咲と真樹以外の・・・。
「てめぇらなんかに何がわかるってんだよぉ！！！！！！！！！！！！！！！」

ガタガタ～バン！！机が突き飛ばされる音。
そしてそのあとは

どすっ！！！！！

という鈍い音が教室中に響き渡った。
真樹は教室の窓から飛び降りた・・・・・。

静まり返った教室の中、美咲は叫んだ。
『どうしてみんなはいつもこうなの？！どうしていじめを見てみぬふりをするの？！友里がいじめられてた時だって、私がいじめられてた時だって！！！！！みんな、いじめはそんなに楽しいですか？友里の次は真樹がいなくなっちゃうかもしれないんだよ？みんなのせいになっちゃうよ？いじめで、何も罪のない人が死んでしまうのは悲しくないの？！つらくないの？！苦しくないの？！どうしてなの？！何でみんな考えてくれなかったの？友里が死んでから、後悔しなかったの？！クラスメイトが死んで悲しくないのぉ！！！！！！！！！！！！！』

その日は事情を知っている人以外全員家に帰された。
みんなの目の前で飛び降りてしまったため、みんなの精神状態は最悪なものだった・・。
美咲は泣きながら家に帰ってきた。
瑠美子は強く抱きしめた。
そして美咲が言った。
『私も友里も、こんなことを望んでいたんじゃないよぉぉ！！！！わぁぁぁぁ～ん』
美咲は大声で泣いた。
クラスのみんなも、同じ様に親の前で泣いていた。

次の日、緊急の保護者会が開かれた。学年の偉い先生が話をした。
「今日は学校はお休みです。１週間は学級閉鎖となります。それからそのあと、しばらくも欠席の連絡は要りません。お子さんが来たいと思ったときに来させてあげてください。」
それで終わったかと思うと伊上先生が話をし始めた。
「皆様、この度は大変申し訳ありませんでした。いじめがあると知っていながら最善の案をだし、子供たちを守ってあげることができなかった私は、教師失格です。本当に申し訳ありませんでした。」
すると母親の一人が立ち上がって言った。
「伊上先生が教師失格なら私たちは母親失格です。子供がこんな風に苦しんでいるのに、私は親として何も気が付いて上げられなかった。ですが、過ぎたものは仕方ありません。今は、子供たちの心をそっと見てあげましょう。親として、１人の大人として、できることをしましょう。子供を責めたりは絶対にしないようにしましょう。私たちも悪いんです。誰の責任でもないんです。子供と一緒に、これからの事を考えましょう。」
伊神先生は泣いていた。
そして、親たちも・・・。
伊神先生のクラスは、週に一回しばらくの間臨時の保護者会を開く

ことになった。
子供たちの様子について、話して学校のことについても話し合うことになった。
親たちは、大人として変わることができた。

＊＊＊＊みんなのその後＊＊＊＊

真樹は2階だったため奇跡的に一命をとりとめたという。
そのことはクラス全員に親から伝えられた。
だけど真樹は、精神科で毎日苦しんでいるという・・・。
クラスのみんなも心の傷が癒えるまでにはまだまだ時間がかかりそうだ。
クラスに行けなくなってしまった人も大勢いたために、
2学期にはクラス替えが行われることになった。

美咲は『これで良いのか？・・・。』と不安になる。
だけど美咲もまだまだ14歳の子供だ。
もう何もできなくなってしまった。
話すこともあまりできないらしい。
そんな時、伊上先生が家に来た。
そして、真樹のことを話してくれた。
「千葉は今、精神病院に入院している。ご飯も食べられなくなって、細い、細い腕にはいくつかの傷跡があったよ。千葉はな、話しているとき香川と斉藤に何度も謝っていたんだ。そしたらな、先生にその傷跡を見せて話してくれたんだ。「この傷はね、美咲を殴ったとき、友里を殴ったときに切ったんだ。いじめをしている自分が憎かったよ。でもね、一度逃げたからもう元に戻ることができなくなってしまったんだ。うちの家族みんな、バラバラになっちゃったの。だから逃げたかったの。でもね、逃げ切ることはできなかったよ。逃げたら逃げた分だけ、余計に苦しくなった。でもさ、友里や美咲

は逃げてなかったよね。それが一番うらやましかったからずっとずっといじめ続けていたのかもしれない・・・。」そう言って泣いていたよ。だからもう、先生まで悲しくなってな、帰ってきたよ。千葉な、退院したら転校するそうだよ。施設に行くんだって。県外の。美咲や迷惑かけた人たちに謝りたいと思っているそうだが、それもできないらしい。もう、会えなくなるって言ってまた泣いてたよ。楽しかったころに戻りたいって言ってたよ。ごめんな・・・・・。ごめんな・・・・。」

そして先生は帰っていった。

その後、2学期に伊上先生が現れることはなかった・・・・。

何人もの子が転校してしまった。

『「いじめ」

皆さんは軽く考えていませんか？

いじめはここまで人を追い詰めてしまうこともあるのです。

お願いです。いじめなんて止めてください。』

香川美咲は、11年後25歳で先生になった。

『伊上先生はいなくなってしまったけど、

これからは香川先生として、中学校で教師をする。

友里、遠くからでもいつまでも見守っててね。

みんなのことを・・・・。』

そして、生きているからには未来がある。

明けない夜などないのだから・・・。

プロローグ（後書き）

いじめについて、深く考えていただけたら光栄です。
樹璃♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8405d/

明けない夜はないよ

2010年12月14日21時22分発行